草加川柳地区

こんなまちになったらいいな

第５回

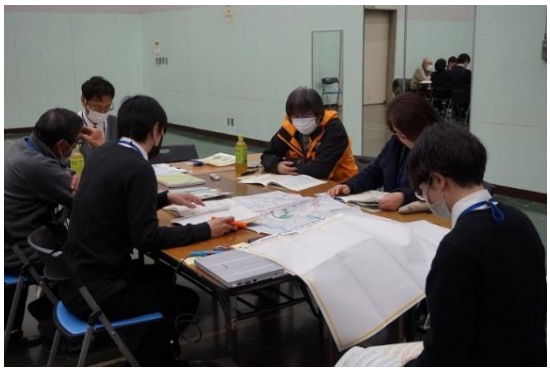
地区別懇談会の記録

日時　　：令和５年２月２２日（水）18:30～21:00
場所　　：川柳文化センター体育室
参加者数：１２名

プログラム

1．開催にあたって
2．コミュニティプランの策定について
3．コミュニティプラン素案について
4．意見交換
　ワーク①：プロジェクトのとりまとめ
　ワーク②：コミュニティプランの進め方
5．検討結果の発表
6．今後の進め方
7．閉会・次回のご案内

当日の様子



当日の記録

ワーク①②では、第３回地区別懇談会と同様に５班に分かれてグループワークを行いました。内容としては、ワーク①では各プロジェクトの内容を確認し、プロジェクトシートを完成させました。ワーク②ではプロジェクトの実施を始め、コミュニティプランの進め方について意見交換しました。

当日検討したプロジェクトの一覧と、モデルプロジェクトの候補、
最終的に選ばれたモデルプロジェクトは以下の通りです。

※第５回に参加していただいた、各班員の皆様の氏名は関係者様以外に公表いたしません。

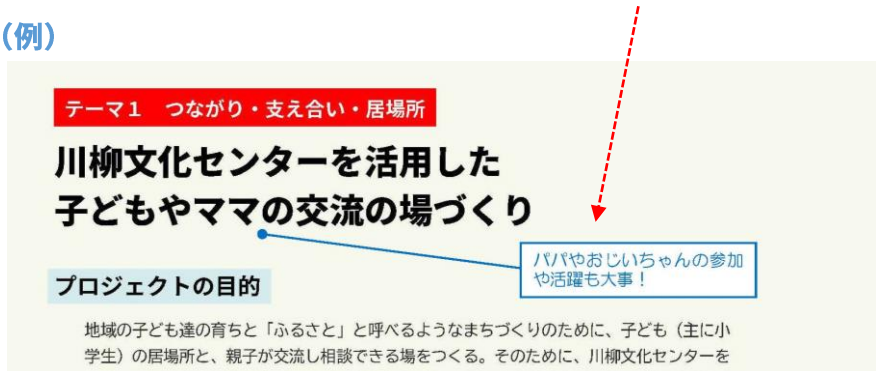
各班で検討したプロジェクト
A・B 混合班
01. 川柳文化センターを活用した子どもやママの交流の場づくり
02. 子ども食堂を拡大してみんなの居場所にしよう
D 班
03. 柿木の町会会館や民家を活用した身近な居場所づくり
04. 子どもが地域を学ぶ野菜づくりと収穫祭体験
05. 多世代による柿木町の寺社仏閣等の歴史資源のＰＲ
C・E 混合班
09. そうか公園を地域のシンボルに！
10. 地域の個人や団体間で情報交換やコラボができる場づくり
11. 地域で連携して自転車のマナーの向上

※C 班は、参加者が少なかったため、E 班と合同となりました

次頁以降に、ワーク①の検討で出された意見をプロジェクトごとに掲載します。

（意見は、その該当箇所ごとに、以下のような吹き出しの形で表示しています）

（例）



01

テーマ１　つながり・支え合い・居場所

川柳文化センターを活用した子どもやママの交流の場づくり

パパやおじいちゃんの参加や活躍も大事！

プロジェクトの目的

地域の子ども達の育ちと「ふるさと」と呼べるようなまちづくりのために、子ども（主に小学生）の居場所と、親子が交流し相談できる場をつくる。そのために、川柳文化センターを活用し、子どもから高年者まで誰もが利用しやすく、生きがいや健康づくり・仲間づくりなどができて、子どもたちの健やかな成長にもつながるような場所にする。

プロジェクトの概要

文化的な施設がここ（川文）しかない！

地区の住民が運営主体となり、既存施設（川柳文化センター）を活用しながら子ども（主に小学生）と保護者を受け入れる「交流の場」を運営する。運営に当たっては、高年者や、地域で活動する組織・大学などの力を生かしながら、多世代交流や様々な年代の人の居場所づくり、孤立防止にもつなげる。

昔はもっと子どもが川文にいたのに、今は登録団体しか使えないのが現状…

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

- ◆ 総合相談センター事業
- ◆ 地域福祉活動推進事業
- ◆ こどもひなんじょ
- ◆ 子育て支援講座
- ◆ 公民館事業
- ◆ 学校応援団

プロジェクトの全体像

STEP 1

● 各分野の得意技を持つ高年者
● 子どもの育ちに関わる資格保有者

活動の具体的な内容を明確にし、実現へ向けた体制をつくる

・地区別懇談会のメンバーが事業の具体的な内容と実施体制の検討を行う。
・メンバーがこれまでの活動や経験などを通して築いたネットワークをたどるなどして、運営に関わってくれる人の整理と呼びかけ方法を検討する。

STEP 2

△ 協力者を募るチラシやポスターの作成・印刷

活動スペースを検討し、関係機関との調整を図る

・STEP 1 で明確にした活動ごとに、いつ、どこ（室外を含む）を使いたいかを整理する。
・現状の利用ルールを超えた利用を想定する場合は、川柳文化センターとの調整が必要となるため、検討・調整を行う。

運営に関わってくれるプレイヤーを探し、活動や協力に関する呼びかけや発信をする

・STEP 1 で具体的に名前があがった団体・個人に対して、手分けをして声かけや相談を行う。
・広く協力者を募るための発信方法を検討し、発信する。

あおはる食堂とコラボして発展を目指したい！

STEP 3

裏庭も活用したい！

△ 参加を呼びかけるチラシやポスターの作成・印刷
△ 行事内容に応じた備品や材料等

企画を具体化し、試行してみる

・単発の行事（屋内・屋外）を企画・実施する。
・参加者の感想を集め、試行結果の振返りと課題の整理を行う。
・試行に対する感想や整理された課題を事業計画へ反映させ、定期的な運営に生かしていく。

STEP 4

△ 基本的なスタッフ対応の取り決め
△ 非常時等の対応マニュアル
□ 関係機関との連携

「交流の場」の定期的な運営や常設化に取り組む

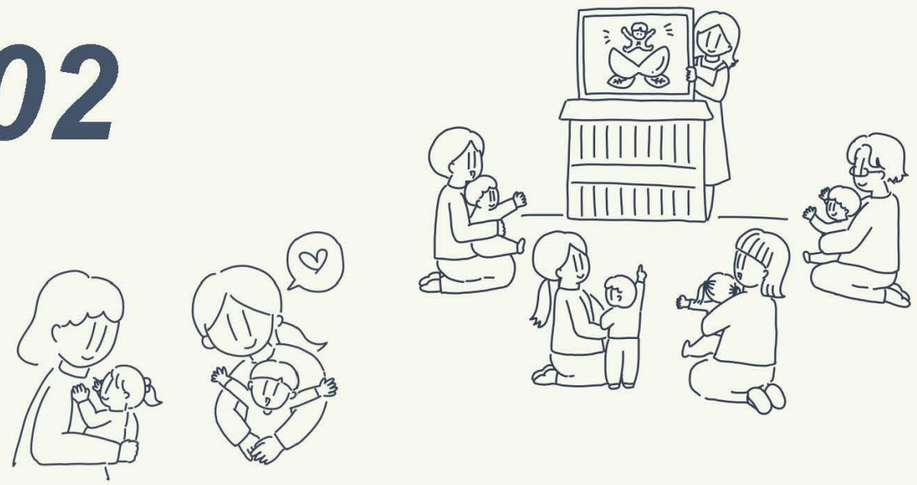
・常設の「交流の場」を運営する。（例：毎週●曜日の●時～●時まで川柳文化センターにて、など）。
・活動に関わるスタッフの育成を行う（理念の継承、倫理や接遇、緊急時対応などの統一したルールの共有）
・気になる子どもが来場した際の体制や仕組み（学校や専門機関との連携）を徐々に向上させていく。

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

- STEP2・既存の施設をもっと活用しよう！ １箇所で良いので、いつでもおしゃべりをできるスペースを設けたい！
- STEP2・地域へ出づらい高年男性に受けそうなイベントを仕掛けて、参加してくれた方をメンバーに誘ってはどうか？
- STEP3・地域で実践されている子ども食堂の活動日に合わせて同時開催してみよう！
- STEP4・埼玉県の子育て支援員研修（地域子育て支援コース）を受講し、メンバーの専門性の向上を図ろう！

受けたことある人いるのかな？受講したら、活動のコアメンバーになれそう！

02



テーマ１　つながり・支え合い・居場所

子ども食堂の活動を拡大して みんなの居場所にしよう

プロジェクトの目的

地域で実践されている子ども食堂の活動の拡大を図り、子育て中の保護者の育児負担軽減と、すべての人にとって息抜きができる場をつくる。また、悩みを抱えた親子などが心を落ち着けて過ごせる場をつくることを通して、子どもの育ちを支えることをめざす。

「居場所」の運営を目指すことは、子ども食堂のメンバー全員で共有できているわけではない。「居場所」に関連する記載については団体としての判断が必要なので、持ち帰りたい

プロジェクトの概要

コミュニティプランにおける他プロジェクトとも連携しながら、既存の活動の拡大を図り、子育て中の保護者の育児の負担軽減とすべての人にとって息抜きができる場をつくる。参加がしやすい「イベント」を入口として、悩みを抱えた親子にとっても心を落ち着けて過ごせる場を「居場所」を運営する。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

- ◆ 都市計画マスタープラン事業
- ◆ 総合相談センター事業
- ◆ 地域福祉活動推進事業
- ◆ 子育て支援講座
- ◆ 総合福祉センターであいの森
- ◆ 空き家バンク
- ◆ 男女共同参画社会推進・支援事業
- ◆ 公民館事業

プロジェクトの全体像

STEP 1

△ 「居場所」の先行事例などの情報
△ 「居場所」の運営に必要な専門的な知見からのアドバイス

拡大する事業を明確にし、課題を整理する

・子ども食堂の活動を拡大する内容として、同日開催する「イベント」の充実と、悩みを抱えた親子などが、心から落ち着いて過ごせる「居場所」も運営するイメージを具体化する。
・「居場所」の運営については事例研究などを行い、実現へ向けた課題を洗い出す。

STEP 2

● 資金集めが得意な人
● 法人化が得意な人

事業計画を作成し、運営する体制をつくる

・「イベント」については、「01 川柳文化センターを活用した子どもやママの交流の場づくり」プロジェクトとの連携により充実を図ることを基本とする。
・「居場所」の運営に関わってくれる人を整理し、呼びかける。資金集めや法人化の方法、関係機関との連携体制の構築を含む「居場所」開設の実務については、関係課の協力も依頼する。

STEP 3

● 空き家など物件の提供者
△ 空き家情報、所有者の情報
△ 居場所の運営に必要な備品類

実施場所を確保し、運営に関わってくれるプレイヤー探しと呼びかけを行う

・「イベント」は、「子どもやママの交流の場づくり」のメンバーと連携し、川柳文化センターを中心とする。
・「居場所」の実施場所として、空き家の活用を視野に入れて確保を図る。具体的に名前をあげられる所有者（候補）に対して、手分けをして相談や声かけを行う。
・空き家バンクの活用など、関係課の協力も依頼する。

STEP 4

△ 基本的なスタッフ対応の取り決め
△ 非常時等の対応マニュアル
□ 関係機関との連携

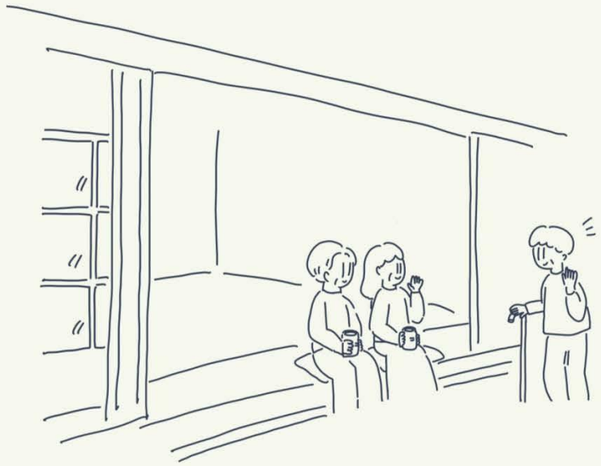
活動を拡大した子ども食堂の運営と、スタッフの力量の向上を図っていく

・「イベント」や食堂開催中に気になる参加者がいた場合は相談に乗り、必要に応じて「居場所」への案内を検討する。
・「居場所」の運営は日々の振返りを行い、その後の活動とスタッフの力量の向上へつなげていくことを重視する。そのために、スタッフ間の情報共有と人材育成に力を入れる。

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP1・イベントを通じて食堂への参加のハードルを下げて、身近に相談できる機能も担うことをめざしたい！
STEP2・現在は完全なボランティアで行っていることを、将来的には収益事業として行うことをめざしていきたい！
STEP3・例えば空き家を活用し、安全で安心な場として地域に提供していけないだろうか？
STEP4・メンバーのネットワークを活用して、元幼稚園教諭、潜在保育士などに声をかけて仲間を増やそう！

03



社協ではふれあい会食を行っている
福祉作業所つばさの森で、パンをつくっている

テーマ１　つながり・支え合い・居場所

柿木町の町会会館を活用した身近な居場所づくり

町会に入っていないと行けないのかと思われそうなので、全体的に町会カラーを薄める。町会会館ではなく、区会館に修正する

プロジェクトの目的

高年者が集まっておしゃべりやお茶ができる身近な場所をつくり、家に閉じこもりがちな高年者の交流の機会を増やしていく。いずれは高年者に限らず、世代を問わず集まれる場所にしていき、子どもや子育て世帯、若い人が集まる場所を充実させ、地域交流が盛んな元気なまちを目指していく。

プロジェクトの概要

柿木町の町会区会館に、気軽に立ち寄れる交流の場、ちょっとした買い物の場を設け、高年者又は多世代が集まり、おしゃべりやお茶ができる身近な場をつくる。自宅から歩ける範囲に気軽に立ち寄れる居場所をつくるため、町会区会館のほかにも、民家の庭先なども活用していく。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

- ◆ 生活支援体制整備事業
- ◆ 地域福祉活動推進事業
- ◆ 介護予防把握事業
- ◆ 認知症サポーター養成講座
- ◆ 商店街元気倍増事業
- ◆ オレンジカフェ（認知症カフェ）
- ◆ 公民館事業
- ◆ 総合福祉センターであいの森
- ◆ ふれあい・いきいきサロン

プロジェクトの全体像

古民家の活用に関心のあるお店を地域の外から呼び込んではどうか。他の地域からのお客さんを呼び込めば、交流も増える

STEP 1

- 居場所づくりの運営協力者
- 民家や庭先の提供者

中心メンバーと運営協力者を募集する

・円卓会議を通じて、町会関係者から実行メンバーを募集する。
・実行メンバー以外にも、町会関係者を通じて、民家の庭先などの場所を提供してくれる人を募集する。

社協の事業と連携してプロジェクトを立ち上げ、町会で運営することもできるのではないか

STEP 2

- □ 町会区会館の利用時間や費用負担の調整
- □ 集客に向けたイベント等の企画

身近な実施場所を検討する

・柿木町内には、柿木公民館以外に町会の区会館が３か所あり、使い勝手が良い。特に、女体神社入口の第四区会館は集まりやすく、最初の活動場所として第一候補とする。
・古民家を上手に再生したお店もあるが、維持コストがかかるため、古民家にはこだわらない。

気軽に立ち寄れる交流の場を企画する

飲食できる場があると、人は集まりやすい

・ちょっとしたものを販売するなどして、人が集まるきっかけをつくる。
・例えば、農家や各家庭で育てた野菜の 100 円マルシェを開いたり、おしんこを作っておすそ分けしたりする。

STEP 3

- 居場所運営のボランティア

地域住民の居場所をつくる

・最初は月又は週に１回、お買物ついでにお茶を飲みながら井戸端会議ができる場を設け、地域交流の場として定着させていく。気楽に同世代で集まる場を曜日やブースで分けるなどの工夫をする。
・居場所が定着していけば、利用者にあられやお茶菓子を持ち寄ってお茶をしてもらう。最初は無料でも、いずれワンコイン払ってでも行きたい場所に工夫していく。

STEP 4

多世代にとって身近な場所へと展開する

・高年者の居場所づくりからスタートし、いずれは一つの場所に多世代のグループがいて賑わうような、子どもや保護者など多世代が集まる情報交換の場所にしていく。
・居場所の管理や世話役は実行メンバーで行いつつ、利用者の中から運営に協力いただけるボランティアを募集して自主運営へと近づけていく。

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP1・民家の軒下や縁側に集まって青空の下でやるくらいの気軽な場所から始めてもいい！
STEP2・パン屋さんに来てもらってちょっとした朝食ができるといい。料理教室もいいかもしれない！
STEP2・買い物が不便な高年者向けに、お試しで移動販売車を呼んで、人を集めてみてもいいかもしれない！

04

テーマ２　歴史・文化・自然

子どもが地域を学ぶ 野菜づくりと収穫祭体験

プロジェクトの目的

地域の子どもが土に触れる機会が減っているため、自然や作物に触れる機会をつくることで、その大切さや地域の歴史を知って地域に根付く子どもを育てていく。豊穣を願う地域のお祭りや、収穫を感謝する秋のお祭りなど、農業体験と収穫祭を同時に体験することで、一連のお祭りの意味と地域の歴史を継承していく。

プロジェクトの概要

単なる収穫ではなく、芽が出るところから作物の成長過程を知る、体験企画とする。農家さんの協力を得て、子どもや親子に、野菜の作付けから収穫までを体験してもらい（「作育」で学ぶ）、豊穣祈願や収穫祭といったお祭りで、みんなで収穫したものを食べて地域交流を行う（「お祭り」で学ぶ）。

収穫祭などのお祭りの場で食べるのではないので、「お祭りへの参加」と「収穫して食べること」は分けて表現する

▼ 行政の関わり・支援・関連

◆ 総合相談センター事業
◆ 都市農業育成・共生支援事業

プロジェクトの全体像

STEP１

● 貸し農地の提供者
● 野菜づくりの指導者

農地の提供者や農業の指導者を募集する

・円卓会議メンバーを通して、地区内の休耕地や広い農地の一部を貸していただける農家を募集する。
・作付けから収穫までの間には農家の協力が必要なため、円卓会議を通じて知り合いの農家に指導者としての協力も呼びかける。

現役の農家さんは少ないため、「農業経験者」という表現とする

STEP２

□ 体験内容の企画、栽培計画や負担費用等の年間計画

協力者とともに収穫体験の内容を企画する

・農業を教えられる人が年々減少しており、稲作は難しい。サツマイモやジャガイモ、カボチャなど、野菜づくりの体験とし、貸し農園･シェア畑のように、畑を提供して参加者に育ててもらう。
・収穫体験を“学びの場”と堅苦しく捉え過ぎず、だんだんと農業の楽しさを体験する機会にする。

STEP３

△ 参加者募集のチラシ
□ 公民館や神社との調整

収穫体験の参加者を募集する

・参加者は地区内の親子とし、「いっしょにジャガイモつくりませんか！」のようなチラシを配布又は回覧し募集する。
・いつも家庭で野菜を育てている家庭でも、最後はお祭りに野菜を持ち寄って、一緒に収穫を楽しめるイベントとして参加を促す。

野菜づくり体験を実施する

・貸し農園のように、参加者自らが農地を耕し、例えばジャガイモの種芋を植えるところから農作業を体験する。
・種植えから収穫までの間も、草むしりなど作業は農家の方に指導をしていただき、農業の面白さと難しさを知る交流の機会とする。

芋煮会ではなく「収穫したものを調理して提供する」という表現とする

収穫祭での交流会を実施する

・はじめは柿木公民館のお祭りとタイアップして、公民館で調理をして芋煮会を開くなど、できることからスタートする。
・いずれは豊穣祈願の「てんのうさま」、収穫祭の「お日待ち」など神社のお祭りと連携し、地域交流の場となるイベントにしていく。

１神社とのタイアップは難しい面があるため「お日待ち」などお祭りの名前は出さない

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP1・柿木で自作で農業を営む方が年々減少し高齢化も進んでいる。子ども達に農業の大切さを伝えたい！
STEP2・「芽が出る」から作物の成長過程を体験して、食べ物の大切さを知ってほしい。食育ならぬ作育！
STEP3・収穫祭での交流の様子は YouTube 配信し、柿木以外の地域や若い人に向けてＰＲしたい！

05

テーマ２　歴史・文化・自然

多世代による
柿木町の神社仏閣等の歴史資源のＰＲ

プロジェクトの目的

柿木には 1500 年来の歴史があると伝わっており、お祭りや神楽、神社仏閣など貴重な資源があるが、PR 不足が地域づくりの課題の一つである。柿木の貴重な歴史資源を PR し、にぎわいと交流人口を創出することによって、将来的に地域経済が潤い、空き家活用やバス交通の充実などの地域課題の解決につなげていく。

プロジェクトの概要

神社仏閣や語り継がれてきた地域の歴史の価値を再認識し、イラストマップづくりやまち歩きなどの PR イベントを、高年者だけでなく多世代を巻き込んで行う。地域の子どもや大人が神社仏閣の癒しの空間に触れる機会を設け、その様子はインターネットや SNS 等を活用して柿木町の魅力を発信する。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

- ◆ 観光推進事業
- ◆ 「ふるさと草加学習」の推進
- ◆ 公民館事業
- ◆ 文化遺産の発掘・保存・有効活用推進事業

プロジェクトの全体像

STEP 1

- 歴史の語り部、観光ボランティアなどの協力者
- 歴史や観光分野の専門家
- 神社やお寺

歴史資源に詳しい方や、情報発信が得意な若者を募集する

・柿木町内でも十王堂や東漸院の仏像の価値が知られていない。柿木町の歴史資源の価値を再確認するため、神社やお寺、地域の歴史に詳しい方や観光ボランティア等に協力を呼びかける。

・円卓会議を通じて、若い世代への SNS 発信が得意な高校生にも協力を呼びかける。

柿木のＰＲ戦略をつくる

・柿木の歴史本を参考に、歴史や観光の専門家を交えて、何をメインに柿木を PR するかの戦略を検討する。（女体神社、東漸院、正福寺跡の仏像、鎌倉時代からの伝承や、豊田姓の由来など）

・例えばパワースポット、願掛けスポットをエピソードと紐づけて PR する。（「正福寺の〇〇のお陰で元気になりました」など）

主な歴史資源としては「十王堂」「東瀬院」「女体神社」をあげておくとよい

STEP 2

- イラストマップづくりの協力者（小中学生）

子どもたちによる「イラストマップ」をつくる

・地域の歴史を後世に継承していくため、高年者だけでなく、子どもも楽しめるイベントを開催する。

・子どもたちに歴史スポットのイラストを描いてもらい、柿木町の「まち歩きマップ」をつくる。

STEP 3

- 観光ボランティアなどの協力者

親子で歴史を学ぶ「まち歩き」を開催する

・子どもたちが描いたイラストマップを片手に神社仏閣を巡る、親子で参加できる「まち歩き」イベントを開催する。

・まち歩きには歴史資源のガイド役として観光ボランティアの方にも協力いただき、地域の歴史や神社仏閣にまつわる伝承などを熱く語っていただく。

STEP 4

- SNSなど情報発信が得意な若い世代の協力者

柿木の魅力を SNS で情報発信・PR する

・「イラストマップづくり」や「まち歩きイベント」を若い世代向けに発信し PR するため、地域にある高校の生徒に協力を呼びかける。

・「まち歩きイベント」をライブ配信するなど、Youtube や Instagram などの SNS で、若い世代向けに PR する。

柿木の歴史資源パンフのリニューアル版、デジタル版ができるとよい

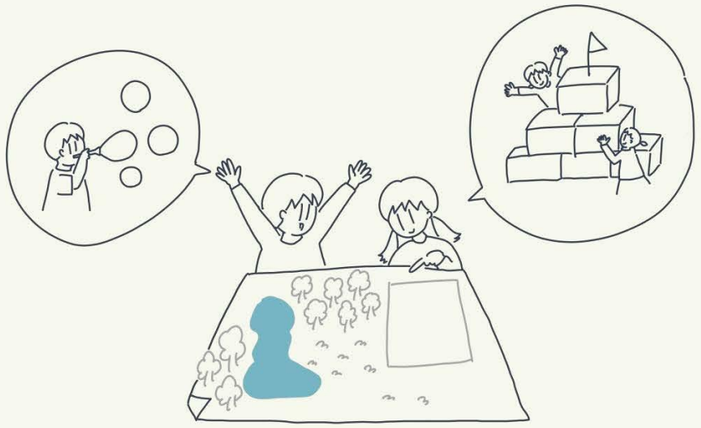
▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP3・「楽笑さんぽ」など神社仏閣を巡るコースなど下地は整っている。更なる PR のテコ入れが必要！

STEP4・観光ツアーが組まれるほどの地域にしたい！地域が潤えば神社仏閣の保存活動の資金もまかなえる！

古くは、下妻街道に多くの人が往来しにぎわいがあった。そういう歴史を風化させず、語り継いでいきたい

09



テーマ３　にぎわい・地域連携

そうか公園を地域のシンボルに！

プロジェクトの目的

地区のシンボル的な存在であるそうか公園の使い方を再考し、いつでも何かしらの活動やイベントが行われるにぎわいのある公園とすることで、子どもでにぎわい高年者も過ごしやすい地区をめざす。特に、子ども達が自由な発想でのびのび遊べる環境づくりを重視する。キャッチフレーズは “地域住民がいつでも集まるシンボルパーク！”

プロジェクトの概要

そうか公園を子ども達が利用しやすく遊びやすい施設にするために、子ども達から「遊びたいこと」を聞き出し、その実現に向けて施設管理者との調整・遊びの企画を行う。また、そうした活動を進める中で公園利用のノウハウを集積し、施設利用者と施設管理者をつなぐ窓口となる団体を立ち上げ、活動を展開する。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

◆ 総合相談センター事業　◆ 公園維持管理事業
◆ 市北東部スポーツ推進地区整備事業（柿木）

プロジェクトの全体像

STEP 1

気軽に参加してもらえるように声掛けする

□ 公園利用の際のルール確認

活動内容を明確化し、活動メンバーを集める

・円卓会議を通じて活動の中心メンバーと賛同者、市の担当課職員で、活動内容や進め方を確認する。
・運営に関わってもらいたい個人や団体への声掛け等により、活動メンバーを集める。例えば、大学のボランティアサークルや子ども会等、子どもとの関係が深い団体など。

STEP 2

小学校の協力を得て、子どもの意見を聞き出せると良い

● 子ども関係の団体等への依頼・調整
□ アンケートの準備

子ども達から「そうか公園で遊びたいコト」を聞き取る

・プロジェクトの目的である「子ども達が自由な発想でのびのび遊べる環境」を実現するために、まずは子ども達がどんな遊びを求めているか、生の声を聞き取る調査を行う。例えば、子どもが集まる場でのアンケート実施や、そうか公園で小さなイベントを実施し、その中で聞き取るなど。

STEP 3

● 草加市みどり公園課・草加市スポーツ振興課との調整

「遊びたいコト」の実現に向けた企画と施設管理者との調整を進める

・子ども達から聞き取った内容を整理し、その中からいくつかの遊びを実現することを目指し、企画検討を進める。その際、市の担当課職員や施設管理者とも十分に調整を行う。
・企画検討を踏まえ、町会や関係団体等が協力して、そうか公園で遊びを実施する
・この「STEP３」を繰返し実施する中で、公園利用のノウハウを集積する。

年に数回など、定期的にイベントを実施できると良い

STEP 4

協力者を募る際には、フリーパーク協議会のメリットを周知していけると良い

「（仮称）フリーパーク協議会」を立ち上げる

・STEP３で集積したノウハウをもとに、施設利用者と施設管理者をつなぐ窓口機能と、施設利用の際の安全面を担保する「（仮称）フリーパーク協議会」を立ち上げる。それにより、手続や利用の際の施設管理者との調整が円滑になり、公園を利用するハードルが下がることで、みんなが利用しやすい公園になる。

そうか公園でのイベント情報や活動情報を一元化する

・現状は、そうか公園で実施されている活動やイベントの情報が一定の住民しか入手できないため、一元化して住民へ提供する方法を、「（仮称）フリーパーク協議会」の活動の中で検討する。例えば、ホームページや SNS 等を活用し、希望する団体等の活動やイベント情報を公開するなど。

ごみ対策協議会のように、団体の代表者が、参加したい時だけ自由に参加できる場になると良い

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP4・１週間のうち、特定の曜日を子どもに開放する日として、そこでは地域の大人が管理者となって、普段できない遊びができるようになると良い。

10

テーマ３　にぎわい・地域連携

地域の個人や団体間で情報交換やコラボができる場づくり

このプロジェクトは、草加川柳地区の「円卓会議」のイメージに近いかもしれない

プロジェクトの目的

地区では個人や団体による様々な活動が展開されているが、お互いの活動や面識があまり無いことも多い状況である。そこで、知り合ったり、つながる場を作ったりすることにより、各々が抱えている課題の共有・解決方法の検討や情報交換等が進み、各々の活動の継続性が高まる。また、将来的にはこれまでには無かったコラボレーションによる活動も生み出される。

プロジェクトの概要

町会・自治会や地域の活動団体が中心となり、地区内で活動する多様な個人や団体が自由に情報や意見を交換する場「(仮称) 地域活性化サロン」を作る。まずは、賛同する個人や団体が集まってスタートし、徐々に参加者を増やしながら場を定例化する。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

- ◆ 総合相談センター事業
- ◆ 地域福祉活動推進事業
- ◆ 町会・自治会活動促進事業
- ◆ 商店街元気倍増事業
- ◆ 公民館事業
- ◆ 総合福祉センターであいの森
- ◆ ふれあい・いきいきサロン

プロジェクトの全体像

大学の研究室やサークルは、参加することで自分たちがやりたいことへ地域の協力を得られる可能性があるため、その点は大きなメリット

STEP 1

● 若い人の意見も採り入れる
□ ミーティングの会場

「情報交換やコラボができる場」について検討する

・まずは町会・自治会役員等が中心になり、賛同者と一緒に町会・自治会会館等で場づくりのためのミーティングを行い、若い世代を始めとする多世代が参加しやすい開催方法・場所・時間帯・雰囲気作り等を検討する。

発信力という視点でも学生を始めとする若い世代の参加は貴重。成功体験や楽しい活動ができれば、様々な方面へ発信してもらえるかも

STEP 2

参加者・参加団体を募る

・地区内で活動する個人や団体等へ「情報交換やコラボができる場」の趣旨や内容を周知し、参加者を募集する。その際、趣旨や内容をわかりやすく掲載したチラシや、SNS（LINE 等）を活用して手軽に参加申込ができるようにするなど、周知の方法を工夫する。
・かしこまった場では参加者が集まりにくいため、例えば「活動上の困りごとがあればお茶でも飲みながら話しませんか？」等、気軽に参加できるよう工夫する。
・地域の将来を担う若者に参加いただけるよう、積極的に声掛けを行う。

STEP 3

「情報交換やコラボができる場」をお試し開催する

・集まった個人や団体で、日頃の活動内容や活動上の悩み等、まずはテーマを決めずに雑談や情報交換から始め、お互いのことを知る。なお、状況に応じてテーマを決めて意見交換を実施する。
・人数によっては参加費制として、カフェや飲食店等で開催することも検討する。

STEP 4

大学生が発案したテーマで話し合えると楽しそう

△ 定期開催のための運営資金

「(仮称) 地域活性化サロン」をつくり、定期開催する

・STEP３を踏まえ、場の名称を「(仮称) 地域活性化サロン」として、口コミや声掛け等により参加者を募りながら場を定例化していく。
・ある時は参加者がテーマを投げかけ、興味関心や専門知識がある個人や団体がそこへ参加する等、自由な形で発展していく。その中で、個人や団体間でのコラボレーションによる活動も生まれる。

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP1・カフェ等のリラックスできる場所で開催できると、若い方も参加しやすいかも！
STEP1・社会福祉協議会が実施しているサロンの雰囲気が参考になるかも！
STEP2・大学生や町会など、周知に慣れている団体等に協力いただけると良いかも！

11

テーマ３　にぎわい・地域連携

地域で連携して自転車マナーの向上

プロジェクトの目的

子どもの親世代も対象に含められると良い

草加市は交通事故が多い自治体であるため、子どもを始め幅広い世代を対象に自転車事故防止のための取組を実施することで、将来的に安全性の高い地域にしていく。まずは草加川柳地区が先進地区となり、地域主体で交通事故防止を啓発する取組を市内に拡大していく。

プロジェクトの概要

町会・自治会を始めとする地区内の団体が中心となり、交通安全に関係する組織や団体等とも連携しながら「自転車マナー週間」を定め、自転車マナーを向上させるためのイベント等を実施します。また、自転車事故が多い場所や危険個所を見える化・地図化し、地域の危険箇所を周知します。

▼ 行政の関わり・支援・関連する取組

◆ 交通安全推進事業
◆ 町会・自治会活動促進事業

プロジェクトの全体像

STEP 1

● 関係する組織や団体の協力

自転車マナー向上のための活動内容の明確化

・まずは町会・自治会役員等が中心になり、賛同者と一緒に活動の方針や実施体制等について検討する。例えば、「自転車事故ゼロ地区」というスローガンを掲げ、強化期間を決めて活動を展開するなど。
・市の関係課や警察など、協力や連携が必要な組織や団体等を整理し、呼びかける。

入学説明会等の場で作成した地図を配布して周知できると良いかもしれない

STEP 2

△ 自治体等が所有するデータ

地区内の危険箇所を確認し、地域へ周知する

・既存のデータやまち歩き等による情報収集を踏まえ、地区内で自転車事故が多い場所や危険な箇所など、実態を把握する。情報収集の際は、自治体や公的機関が所有するデータを活用する。
・把握した情報は、見える化・地図化し、STEP３以降の取組を始め、様々な場で地区住民へ周知する。

STEP 3

● 関係する組織や団体の協力
■ イベントの企画・検討

自転車マナー啓発のためのイベントを実施する

・自転車マナーを啓発するイベントを実施する。その際、単発で開催する場合、参加者が集まらないことも想定されるため、地区内で開催される子どもが集まるイベントや活動等と同時開催又はブースを出店する形での実施を検討する。
・イベントは、身をもって自転車マナーの重要性が理解できるように、「人の命を大切に」「体験しながら学べる」「目で見て実感できる」等の視点を踏まえた内容とする。例えば、自転車事故の被害者と加害者の苦悩がイメージできる映像上映や、ゲーム形式で自転車マナーが学べる体験など。

自転車マナー週間を決めて対策を強化する

・「自転車マナー啓発のためのイベント」と並行して、町会・自治会で実施している下校見守り隊を参考に、地区独自で自転車マナー週間を決めて、交通安全のための活動を一部エリアで実施する。
・また、同期間には自転車事故防止を意識啓発する横断幕等も掲示する。

警察署に協力してもらえると良い

▼ 地区別懇談会であがったご意見・アイデア

STEP3・参加者に景品を用意できると集まりやすいかもしれない。
STEP3・すぐに解決できることではないため、何回も何回も繰り返し、継続的に取り組むことが大事！

ワーク②：コミュニティプランの進め方

ワーク②ではプロジェクトの実施を始め、コミュニティプランの進め方について意見交換しました。

円卓会議の進め方	・お酒を飲んで集まるとか、楽しいことをやってる様子が分かれば集まるのではないか。地元の集まりの延長で、円卓会議にも参加できるといいのだが。
	・あまり型にはめずに、ユニークに自由にやったほうがいい。楽しくないと誰も参加しない。
	・地域住民が事務局を担うのは大変であるため、川柳文化センターの協力を得るなど必要では。
	・柿木公民館の利用者に声をかけてはどうか。

円卓会議のイメージ	・これまでと同様に、町会に負担が偏ることを危惧しているが、（市もメンバーの一員として伴走支援するのであれば）行政と対等に話し合える場として、今までの各種会議とあり方が異なる形を目指したい。
	・名称が固いので変えよう。もっと分かりやすく、なじみやすい名前に変えよう。（1 回目の会議で考える、公募する、地域の小学生に出してもらうなど）
	・円卓会議の４つの役割について、課題だけでなく、「宝物」（地域の資源・良い所）も出す場にした方がよい

円卓会議への参加しやすさ・人集め	・町会などの地元の集まり･ネットワークだけでは限界がある。
	・人集めは課題であり、広く周知するだけでは人は集まらないため、ピンポイントでアプローチし、そこから芋づる式に集めると良いのでは（地区別懇談会の参加者募集と同様の方法）
	・円卓会議の参加者をどう集めるかは課題。町会以外の方をどう集めるか。

その他	・今は誰でもスマホ･SNS で情報を探せる時代。柿木にないものを持ってこないと、地域住民の関心は得られないのではないか。
	・柿木の人は、外に出てこない。若い人も自宅のお庭で遊べる。メンバーの高齢化は進んでいるが、柿木産業倶楽部の集まりには若い人もいる。